

# いしかり 曆

## 長谷川嗣氏追悼号

追悼号発刊に寄せて.....	会長 山口 福司
長谷川嗣氏 年 譜 (稿) .....	4
受賞略記 (稿) .....	6
著述 譜 (抄) .....	7
解説・筆写史料目録 (抄) .....	10
(仮題) 長谷川嗣氏の胸懷録 (抄) .....	13
文学作品 短 歌.....	15
詩 そのとき(詩らしく一).....	16
ある古調(詩らしく二).....	18
解説文書から	
長谷川嗣編 石狩雑話来歴—開拓使文書ヨリ (抜)	
所載にあたって.....	田中 實...19
長谷川嗣編 石狩雑話来歴—開拓使文書ヨリ (抜) .....	20
松浦武四郎研究会のあゆみ.....	吉田 千萬...27

## 第 8 号

## 石狩町郷土研究会

1989年 3月

## 追悼号 発行に 寄せて

会長 山口 福 司

私たちが齊しく尊敬していた、故長谷川嗣さんが、昨年（一九八八年）二月二十七日逝去されてから早や一周年になりました。

去る二月十九日ホテル札幌会館に於て、縁りの方々相集り一周忌法要が営まれました。

生前厚い親交のあった会員の田中實さんによって会はず、められ、故人と交わりの深かった方々の思い出が語られました。

北海道議会議員高橋庸さん、元石狩町生振農協組合長・元石狩町教育委員長長横山敏美さん、生振小学校同級生・元石狩町議会議員中田竹雄さん、北海道大学附属図書館北方資料室吉田千萬さん、元生振公民館長・元石狩町農業委員会会長竹内始さん、札幌アイヌ文化協会会長・石狩町出身豊川重雄さん、そして、私も末席を汚させていただきました。生前寡黙であった長谷川さんの知られざるお人柄が浮き掘りにされ、会衆の感銘を深くしました。

それにつけても、当日配布された故人の生涯にかかわるの「葉」です。田中實さんが執念とも云える、故人の残された膨大な遺作、遺稿が整理され、集約された資料に、会衆は改めてその隠された偉業に瞠目いたしました。この「葉」があつてこそ、当日の法要が深く意義づけられました。

また、去る二月十八日に当会の例会があり、機関紙「いしかり暦」第八号を、故長谷川嗣さんの業績を讃えて、追悼号とすることに満場一致で決定いたしました。

想えば、この「いしかり暦」の名も故長谷川嗣さんが名付親であつたと云うことです。昭和三十五年に本会の創立会員となられ、当日は議長を務められ、同時に理事に就任され、爾来つねに指導的役割を果され、昭和六十年から逝去されるまで顧問をお願いいたしておりました。

さて、生前の長谷川さんは、まことに寡黙な方で、知る人ぞ知る一部の方以外は、その特異な存在に、余り理解されない向きも少なくありませんでしたが、このたび、残された膨大な資料が発掘、整理されて本誌に掲載されることになり、その格調高い業績に会員一同、改めて長谷川さんの偉大さに敬服した次第です。

なお、まだ未発表のものが沢山あると聞き及んでいます。向後さらに陽の目を当て、斯界に役立てたいものです。故長谷川さんは、私達の指標として末長く生きつづけることでしよう。ご冥福をお祈りして、ご霊前に捧げます。



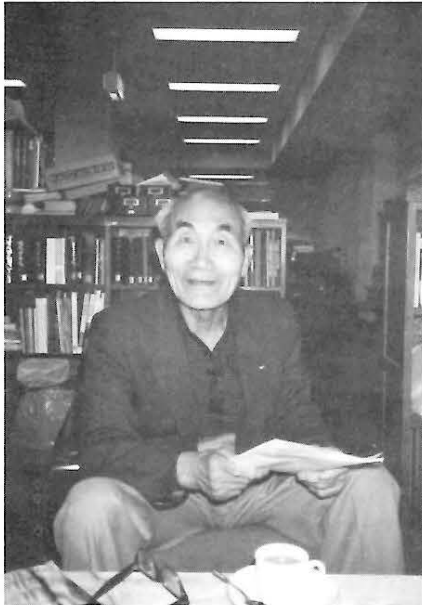
故 長谷川 嗣 先生



リチャード・エドモンド博士（現ロンドン大）  
と石狩河口にて（昭和53年）



アドバルーン業時代（昭和8～10年）  
岐阜県庁屋上



北海道大学北方資料室で  
資料に目を通す



「渡辺惟精の日記」  
出版祝賀会でハルエ夫人とともに  
謝辞を述べる（昭和58年）

## 長谷川嗣氏 年 譜 (稿)

- 1906 明治 39. 4. 20 農業、長谷川六兵衛(仁作) オモ夫妻の長男として北海道石狩町大字生振村7線南6番地に生まれる。(父の経営面積約17ha)
- 1913 大正 2. 4. 1 石狩町立生振尋常高等小学校入学。  
(7才)
- 1918 大正 7. 3. 31 同校尋常科卒業(第22回卒業生 男17名・女11名)  
4. 同校高等科入学
- 1919 大正 8. 3. 同校高等科一年終了
- 1920 大正 9. 4. 北海道庁立札幌第二中学校(現札幌西校) 入学(第9期生)  
(14才)
- 1921 大正 10. 此の頃から大杉栄発刊の「労働運動」を読み影響を受ける。創作活動も活  
(15才) 発となる。
- 1922 大正 11. 3. 同校3年修了、退校。創作に没頭、作品を発表、習作も多い。  
(16才) 祖父(初代)六兵衛死去(72才)  
余市町土木工事現場(余市川埋立てと堤防工事)に就労。タコ部屋の実情を目撃する。
- 1926 昭和 1. 徴兵検査後、札幌市北一条の病院で往診用の人力車夫に就労。約1年半勤  
(20才) める。社会主義や労働運動に関心を強める。
- 1928 昭和 3. この年頃上京し、もと大杉栄のいた事務所を訪ねる。これから、新聞配達  
(22才) 菓子袋売りで生計を保ちながら、機関紙配付や運動員間の連絡要員として活動する。
- 1931 昭和 6. 3. 25 函館市海岸町、北浜船造・トイ夫妻の三女ハルエと結婚。デパート、県庁、  
(26才) 市役所などのアドバルーン業を自営。
- 1932 昭和 7. 5. 長女洋子誕生。
- 1934 昭和 9頃 妻ハルエ病気療養のため鎌倉市に転居。  
(29才) 約1年半後、東京通勤が不便なため、横浜市に転居。
- 1936 昭和 11. 祖母キミ死去(86才)
- 1937 昭和 12. 妻ハルエ療養のため北海道石狩町の父の家に移り、9月横浜に戻る。
- 1940頃 昭和 15頃 思想弾圧強化し、身辺に危険が迫る。  
(29~30才)
- 1943 昭和 18. 7. 長男心平誕生(於 横浜市)
- 1944 昭和 19. 2. 思想弾圧により逮捕され横浜笹下刑務所に投獄後、埼玉県松山飛行場建設  
(38才) 現場で強制労働。

- 1944 昭和 19. 7. 妻ハルエ、長女・長男を連れ北海道石狩町の両親宅に疎開。
- 1945 昭和 20. 3. 飛行場建設工事中止。身体衰弱し体重40キロ以下まで減る。陸軍記念日に  
(39才) 釈放される。  
3月15日生家に帰り、札幌の天使病院に入院衰弱を癒す。10月以降、日本  
社会党の地方組織などの結成に携わる。(入党・党籍は東京?)
- 1946 昭和 21. 農業に従事。自作地周辺農業者と相計り、約40ヘクタールの造田化を図る。  
(40才)
- 1947 昭和 22. 農地改革により、父名儀の田3町5反8畝25坪が買収される。  
8月、2男温誕生。
- 1948 昭和 23. 2. 18 石狩町生振農業協同組合創立総会に於て監事に選出される。  
(42才)
- 1949 昭和 24. 8. 6 生振村旱害対策委員会実行委員。4月、3男渡誕生。
- 1950 昭和 25. 6. 7 町立生振小学校PTA副会長(27年退任)、生振社会教育後援会運営委員、  
石狩町生振青年会顧問、生振揚水組合代表。6月、4男勝誕生。
- 1951 昭和 26. 4. 石狩町教育委員会教育委員に当選(公選)。生振村7線南農事組合長(1  
(45才) 年間)。  
日本社会党石狩支部結成(?)顧問格として参加。
- 1952 昭和 27. 母オモ死去(75才)
- 1953 昭和 28. 石狩町生振農業協同組合代表監事。
- 1954 昭和 29. 石狩町教育委員会副委員長
- 1955 昭和 30. 北海道協同農業研究所会員。日本社会党石狩支部長  
(49才)
- 1956 昭和 31. 7. 石狩町教育委員退任(公選廃止)
- 1957 昭和 32. 10. 18 「生振だより」発行責任者(35年1月まで7号発行)。生振村7線南農事  
組合長(1年間)
- 1958 昭和 33. 石狩町生振農業協同組合代表監事退任。石狩地区農民同盟結成準備委員。  
(52才) 12. 21 石狩町農民同盟結成総会に於て書記長に選出される。
- 1959 昭和 34. 1. 18 石狩町民主団体連絡協議会主催の「勤労婦人・勤労者主婦懇談会」を成田  
(53才) 屋旅館で開催。(梅田北海道母子くらしの会々長・横路節雄衆議院議員夫  
人、出席)  
3. 24 石狩地区農民同盟結成総会(於札幌)で副委員長に選出。  
日本社会党道連荒哲夫選対本部農対委員会委員長。
- 1960 昭和 35. 3. 30 石狩町郷土研究会創立総会(仮議長)理事(59年まで)。  
(54才) 正木清選対本部副委員長。
- 1963 昭和 38. 3. 長男心平道立野幌高等学校卒業、農業を継ぐ。

- (57才) 心平在学期間に、同校父母と先生の会々長。  
日本社会党北海道支部連合会農業対策委員会委員。  
日ソ友好協会一行とソ連農業視察(約1ヵ月)。
- 1966 昭和41. 7. 26 第5回古文書解読講座に参加。以後の講座に殆ど参加。同日発足の北海道史研究協議会に入会。  
(60才) 石狩町文化財保護委員。日本社会党北海道本部農村対策委員。生振村第7農事組長(1年間)
- 1967 昭和42. 全道地区労石狩町選対委員長。生振村史編纂委員。石狩町誌編纂委員(死去まで)。石狩町議会議員に立起110票獲得するも惜敗(定員22名・立候補者29名、「うち社会党3名・当選1名」)。(日本社会党公認・石狩地区労推薦。推薦者一衆議院議員横路節雄・同島本虎三・参議院議員小林武同吉田忠三郎他)  
(61才)
- 1968 昭和43. 父六兵衛死去(92才)
- 1969 昭和44. この頃より高倉新一郎先生のご指導により古文書解読を始める。(北大附属図書館等で)  
(63才)
- 1970 昭和45. 10. 「尚古堂主人代田茂17回忌追悼の集い」の発起人の1人として事務を担当(発起人…畑谷千代治・長谷川嗣・渡辺茂・高倉新一郎・山野成之・藤崎茂・近藤紫村・五十嵐久一・相良義重・更科源藏)。
- 1972 昭和47. この頃より「伊達火力建設反対運動」や「伊達裁判・伊達環境権訴訟」に参加活動  
(66才)
- 1973 昭和48. 日本社会党石狩支部長退任。  
北海道史研究協議会第21回古文書解読講座を石狩町で開催。翌日の第10回研修会「石狩町内史跡巡回」で高倉新一郎先生とともに講師として案内。北海道新聞(6・21付)は、「秩父事件のリーダー井上傳藏の石狩町開拓農民としての新資料発見、発見者長谷川嗣」と報道。
- 1974 昭和49. 北海道史研究協議会常任幹事。(死去まで)  
(68才)
- 1975 昭和50. 日本社会党石狩支部長として石狩支部再建大会を開催。「社会新報石狩町版」発行責任者。  
朝日新聞(9・23付)は、「江戸後期のロシア地図北大図書館で発見一当時の狩猟航路詳しく一発見者長谷川嗣」と報道。
- 1976 昭和51 長野県野尻湖遺跡発掘調査に参加。この頃豊前火力絶対阻止運動に協力。  
(70才) 石狩町農民同盟委員長として活動。
- 1977 昭和52. 11. 老人性尺骨神経遅速型摩脾症(俗称「鷲の手」)で幌南病院入院・手術。  
(71才)

- 1978 昭和 53. 6. 6 北海道産業考古学会発足。入会。この頃「大雪の自然を守る会」に参加。  
(72才) 秋、リチャード・エドモンド博士（現在ロンドン大学）と「北海道開拓と  
屯田兵」の件などで交流始まり後年に及ぶ。  
北海道新聞学術文化研究奨励金推薦に「蝦夷場所請負人文書の所在件名目  
録」研究代表として応募するも不採択。
- 1979 昭和 54. 日中友好農業視察団の一員として中国視察。  
(75才)
- 1980 昭和 55. 8. 26 北海道開拓記念館友の会発足。入会。  
(76才) 春、健康を害し北大附属病院に入院。10月直腸ガン前期症状により第1外  
科で10月9日、同16日の再度の手術を受ける。12月20日、札幌市茨戸の恵  
北病院に転院加療。
- 1981 昭和 56. 4. 中旬 恵北病院から退院。
- 1982 昭和 57. 3. 石狩町文化財保護委員退任。  
「松浦武四郎を語る会」（現「松浦武四郎研究会」）発起人となり、この  
年発足。代表となる。（59年2月まで）
- 1983 昭和 58. 10. 10 北海道出版企画センターより編書「空知集治監初代典獄渡辺惟精の日記一  
(77才) 空知・宮城・三池監獄裏面史」を発刊。毎日新聞（11・18付夕刊）は、「が  
んと闘い、明治の文書解読『空知集治監初代典獄の日記』」を出版。3年か  
けコッコツ石狩の長谷川さん」と報道。  
11. 19 札幌市きょうさいサロンで出版記念会（出席者 102 名、発起人—秋月俊幸  
秋葉実・高倉新一郎・寺内靖治・能登和夫・横路美喜）  
当日の祝辞—横路孝弘・山田秀三。  
石狩公民館生振分館「公民館だより」第7号（12・25付）で前記編書紹介  
朝日新聞連載「北の語りべ」に「古文書の解読長谷川嗣さん」として6回  
掲載。
- 1984 昭和 59. 2. 北大北方資料室からの帰宅途上、自宅附近のバス停留所前で交通事故、恵  
(78才) 北病院に入院。1週間で退院するも、4月北海道脳神経外科記念病院に入  
院、頭部硬膜下血腫のため手術を受ける。術後は失書、失読症状に悩まさ  
れたが、6月末退院。自宅療養をしながら解読・執筆を再開。
- 1985 昭和 60. 石狩町郷土研究会顧問。
- 1986 昭和 61. 5. 開拓記念館友の会国内研修旅行「南東北の博物館・史跡めぐり」に参加。  
(80才) 同年 10. 8 北大附属病院で検査。がん再発のため再手術。（余命6カ月位の宣告  
あるも本人に知らされず）入院加療。12・31 吟句「ろうそくの残り燈ほそ  
る師走かな」
- 1987 昭和 62. 1. 10 札幌市北区の田所外科病院に転院加療。5月上旬退院。自宅にて執筆・解



(81才)

読を続け、江差・松前・余市等に資料収集に出かける。

北海道史研究協議会創立20周年記念協賛会副会長。同協賛会記念誌「創設二十年の歩み」に、「蝦夷場所請負人文書について」を執筆寄稿。

7. 30 石狩町郷土研究会例会に出席。

8. 11 北海道史研究協議会創立20周年記念式及び祝賀会に出席。(札幌・ホテルアカシヤ)

12. 4 田所外科病院に再入院。

1988 昭和 63. 2. 27 午後7時3分、妻・子供・孫・兄弟の見守る中で、同病院にて死去。

(82才)

辞世句「神仏彼には彼の所存あり」

2. 29 法名「真光院釋浄生」、石狩町生振公民館にて葬儀(通夜)

3. 1 告別式執行(顧問、北海道大学名誉教授、北海道史研究協議会会長高倉新一郎外。葬儀委員長、前石狩町生振農業協同組合組合長横山敏美)。

(注)

長谷川嗣氏の没後、息心平氏と大量の遺品整理に当らせていただきましたが、別記の簡単な「長谷川嗣著述譜」のほか、身辺に関する記録(履歴・受賞・活動・家族等)は全く確認できませんでした。氏の恬澹さに今さらながら瞠目しました。従ってこの年譜は、心平氏からの聴取と遺品から抽出した関係書類、新聞所載の「北の語りべ」、町内既刊の記念誌等と石狩町郷土研究会員として収録してきた私の資料などによりまとめたものです。遺漏の点が多いと思います。ご教示いただければ幸甚と存じます。

なお、敬称は略させていただきました。年齢は数え年で記載しました。

(1989年2月編者記)

## 受賞略記（稿）

（1989年1月15日現在判明の分）

- |      |               |   |
|------|---------------|---|
| 1946 | 昭和 21. 11. 17 | 生振国民学校開校五十周年記念協賛会会長渡辺善祐より感謝状  |
| 1950 | 昭和 25. 10. 2  | 石狩町第2回農畜産品評会々々長石狩町長飯尾円什より賞状（燕麥 2等賞）                                 |
| 同上   | 昭和 25. 10. 8  | 石狩地方産業振興共進会主催農産品評会々々長石狩支庁長小林行夫より賞状（燕麥 2等賞）                          |
| 1951 | 昭和 26. 10. 15 | 石狩町第3回農産品評会々々長石狩町長飯尾円什より賞状（菜種 3等賞）                                  |
| 1958 | 昭和 33. 4. 13  | 石狩町生振農業協同組合々々合長宮前茂重より表彰状（農協役員としての功績）、感謝状（農事組合長としての功績）               |
| 1961 | 昭和 36. 9. 15  | 北海道農民同盟委員長須藤秀吉より感謝状（同盟役員としての功績）                                     |
| 1964 | 昭和 39. 11. 23 | 石狩町農業まつり実行委員会々々長石狩町長鈴木与三郎より表彰状（土地改良並に造田事業計画の功績）                     |
| 1968 | 昭和 43. 9. 11  | 北海道野幌高等学校20周年記念事業協賛会々々長本間金治・北海道野幌高等学校々々長田初繁富より感謝状（父母と先生の会々々長としての功績） |
| 1970 | 昭和 45. 7. 4   | 浄土真宗本願寺派本願寺札幌別院輪番坂本至誠より感謝状（札幌別院再建の功績）                               |
| 1978 | 昭和 53. 4. 14  | 石狩町生振農業協同組合組合長吉田武雄より感謝状（組合役員11年間の功績）                                |
| 同上   | 昭和 53. 9. 7   | 北海道農民同盟委員長岡本栄太郎から感謝状（役員としての功績）                                      |
| 1983 | 昭和 58. 11. 19 | 三笠市長能登和夫より感謝状（三笠市指定文化財「空知集治監初代典獄渡辺惟精日記」全6巻にわたる古文書解説出版の功績）           |

（注）

年譜（稿）のとおり、記録されたものはなく、1枚の掲額（三笠市長感謝状）を除いて、大量のダンボールや空袋のなかの書類やチラシなどのなかに交っておったものをまとめて、年代順に記しました。

（1989年1月 編者記）

# 著 述 譜 (抄)

長谷川 嗣 (1982年)

田中 實 (補編)(1989年)

西暦	元号	年齢	書名・作品名	ジャンル 枚数	所載書誌名・発行所	筆名
1922	大正 11	才 16	義 姉	(創) 4頁	「路傍人」5号 路傍人社	長谷川 貢
"	"	"	人 間	(創) 4 "	「路傍人」6号 同上	同 上
"	"	"	希望はなくとも	(創) 500話2枚	未 発 表	"
"	"	"	餓死をした老人の話	(創) 4枚	"	"
"	"	"	待ちあぐむで	(創) 200話18枚	"	"
"	"	"	警語—北の言葉	500話1枚	"	吾己 北人
"	"	"	或る男の夕方	(創) 250話7枚	"	長谷川 嗣
"	"	"	恋と無駄事	(創) 400話2枚	"	長谷川 貢
"	"	"	恋する心	(創) 400話4枚	"	"
"	"	"	春の夢	(創) 400話4枚	"	"
"	"	"	二人の男	(創) 240話13枚	"	"
"	"	"	村の女教員	(創) 240話2枚	未発表 (未完)	長谷川 貢
"	"	"	海霧の夜	(創) 400話9枚	"	都鳥 京二
"	"	"	出家と俗人 (一幕)	(脚本) 3枚	" (未完)	長谷川 貢
"	"	"	(「ほの暗き仏室にて朝夕蠟燭の灯影に読経を為し給ひし 今は無き祖父上に此の一篇を捧ぐ」)			
"	"	"	姪と従弟	(創) 400話1枚	" (稿)	"
"	"	"	$\frac{1}{3}$	(創) 400話1枚	" (")	"
"	"	"	追懐 3篇	(詩) 200話4枚	"	"
"	"	"	頬笑み	(詩) 200話2枚	"	"
"	"	"	酒と涙 外2篇	(詩) 240話3枚	"	"
"	"	"	地図の上に	(詩) 240話5枚	"	"
"	"	"	抒情詩集 19編	(詩) ノート1冊	"	"
"	"	"	若い男の唄 9首	(口語短歌)	"	"

西暦	元号	年齢	書名・作品名	ジャンル 枚数	所載書誌名・発行所	筆名
1922	大正 11	才 16	日々の唄 8首	(短歌)	「路傍人」?	長谷川 貢
"	"	"	父病む 13首	(口語短歌)	「路傍人」「其中会報」 「札幌短歌会」	"
"	"	"	巻頭の辞	(詩) 400 詰 1 枚	未発表	"
"	"	"	神経衰弱と生活法	(隨筆) 240 詰 1 枚	"	"
"	"	"	所懐 代田君	(隨筆) 250 詰 3 枚	"	"
(「二中教育に対する? 学校止そうと思ふ…)						
1923	12	17	短歌 1首	(短歌)	「婦人界」1月号	"
"	"	"	時は流れて	(詩)	未発表	"
"	"	"	懐涙情 他5篇	(詩)	"	"
1925	14	19	車夫の言葉	(詩) 2頁	「無産人」創刊号 無産人社	井上 松男 (棚田義明 補筆)
代 昭和 1940 20代	40		私の農業経営方針— 若干の夢を取り入れて	(文) 11枚	?	
年 年 1949 24	才 43		農業所得税の算出方法に対して	(文) 3頁	「いぶき」2号 石狩町生振青年会	長谷川 嗣
1950	25	44	農協と青年の果さなければならぬ 役割について	(文) 3頁	「いぶき」3号 同上	顧問 長谷川 嗣
1955	30	49	29年度冷害凶作の実法	(文) 3頁	「土の香サークル」創 刊号 土の香サークル	顧問 長谷川 嗣
"	"	"	詩をつくりませんか	(文) 1頁	同 上	同 上
1957	32	51	家畜(乳牛・鶏)は凶作を救うか	3頁	「土の香サークル」3号 同 上	"
1969	44	63	九町三村時代の石狩	(単行本) 77頁	石狩町誌編纂委員会 生振郷土史編集委員会	"
1971	46	65	石狩川とチョウザメ	(隨筆) 3頁	「赤れんが」12号 北海道行政資料室	"
"	"	"	その時(詩らしく一)	(詩) 500 詰 4 枚	未発表	"
"	"	"	ある古調(詩らしく二)	(詩) 500 詰 2 枚	"	"
"	"	"	行政資料を利用して	(座談会) 7頁	「赤れんが」13号 北海道行政資料室	"
"	"	"	生振郷土史資料目録	20頁	生振郷土史編集委員会	"
"	"	"	石狩町生振墓地調査	2頁	未発表	"
1973	48	67	石狩川に沿うての明治百年の旧跡 —未完のノート—	(単行本) 16頁	石狩町郷土研究会	"
"	"	"	石狩場所請負人村山家記録	(単行本) 38頁	石狩町史編集委員会	"

西暦	元号	年令	書名・作品名	ジャンル 枚数	所載書誌名・発行所	筆名
1974	49	68	伊達は山紫水明の地—そこには7千年前から人類の生活があった	5頁	「どんだりこんだり伊達火力」伊達裁判に勝ってもらう会	父さん
1976	51	70	「松前産物大衆鑑」と北海道産物製造手続	(単行本) 37頁	石狩町史編集委員会	長谷川 嗣
1977	52	71	石狩新聞願末—地方町村新聞の一つの夭折形態(上)	6頁	「北海道史研究」12号 北海道史研究会	〃
1978	53	72	同上(下)	30頁	「同上」14号 同上	〃
〃	〃	〃	西本願寺生振門徒講結講 75周年略記	7頁	私刊	〃
代 1970		代 70	生振郷土史—百年の風雪に耐えて(明治4年までの部)	500詰 約90枚	未発表	〃
1980	55	才 74	幌南病院整形外科506号室から	(随筆) 500詰8枚	〃	〃
1982	57		辛巳明治14年1月「袖中鏡」 (大萱生秀行日記)	(解説) 78頁	「十軒」 十軒神明宮協賛会	〃
〃	〃	〃	北大中央図書館内北方資料室所蔵 村山家文書中に包蔵せる井尻静蔵 家文書目録	5頁	「いしかり暦」3号 石狩町郷土研究会	〃
1983	58	77	空知集治監初代典獄渡邊惟精の日記—空知・宮城・三池監獄裏面史—	(単行本) 400頁	北海道出版 企画センター	〃
1986	61	80	著述に対しての私的メモ	4頁	「いしかり暦」6号 石狩町郷土研究会	〃
1987	62	81	蝦夷場所請負人文書について	2頁	「創設二十年の歩み」 北海道史研究協議会創 設二十周年記念協賛会	〃

(注)

- この表は、長谷川嗣氏が1982年(昭和57年)に「長谷川嗣著述譜」と題して、発行年、年令、題名、(所収)雑誌、発行所、備考と分けて半契紙2枚に記した13件を底書としました。
- 1988年2月の氏の没後、所蔵書、研究文書、収集史料などの整理に当たった息、心平氏と補編者が多量の未整理品のなかから、抽出して原則として1の分け方に従って補筆しました。
- 整理期間が、1988年10月から1989年2月初旬までの短期間に過ぎなかったため、遺漏があると思います。
- 1926年(昭和1年)から1945年(昭和20年)までの著述が空白となっております。御令室のハルエ様から心平氏が聞かれたところによりますと、別記の年譜の事情などから、「蔵書や著述関係はいっさい縁者に預かってもらっておったまゝ、1945年身一つで生家に戻った」とのことで、今となっては確かめることができません。
- 1の著述譜は、長谷川嗣氏のご自身のことについてまとめられた唯一のもので、他は著述作品や談話、他関係書類等から推察するほかありません。遺漏の点をご教示いただきたく存じます。

(1989年2月 編者記)

解説・筆写・史料目録（抄）

文 書（等）名	所 蔵	内 訳	備 考
村山傳兵衛文書	北 大	1,200点	目録作成
伊達林右衛門文書	同 上	1,500点	同上
笹浪家文書	同 上	200点	同上
入北記（島義勇）	同 上	3冊	（丸山道子氏解説） 筆写
函館日記 … 三田花朝尼	同 上	1冊	解説（未刊）
函館かへるさの記 … 三田花朝尼	同 上	1冊	同上
おあん物語	同 上	1冊	同上
クドウよりルハモッベ迄	同 上	1冊	同上
会津降伏人勤慎日記	同 上	1冊	同上
藤野確詰所事業摘要 同技術員生徒例則	同 上	丁数 16丁	筆写
蒹葭堂雜録卷の四	北 大		解説（未刊）
浪華 前鐘成 暁晴翁撰			同 上
秋田庄内雇給料勘定帳寅七月藤野御店リイシリ運上屋	北 大	丁数 11丁	同 上
文政五年四月東西蝦夷地人別並収納高除金調子扣			同 上
正徳元年御條目 卯之七日		500字詰 7枚	同 上
松府録俸志	北 大	（1,000字詰） 102枚	同 上
享和元年歳次辛酉西蝦夷道中記（磯谷則吉）	同 上	500字詰 49枚	同 上
岩内石炭山書類（木村正義・木村源次郎記）	同 上	1,000字詰 142枚	同 上
岩内硫黄山書類（1）（2）（木村時斉）	同 上	同 上 146枚	同 上
函府録（壺）（式）（參）	同 上	同 上 527枚	同 上
木村家文書「蝦夷地御達留目録」（卷之一） （卷之三）（卷之四・卷之五）	同 上	同 上 370枚	同 上
明治三庚午石狩町関連文書（石狩役所）	道行政資料室	500字詰 107枚	同 上
明治三庚午石狩町関連文書 （東京・農政掛・開拓使）	同 上	同 上 115枚	同 上
明治四年未年石狩文書（開拓使）	同 上	同 上 13枚	同 上

文 書 (等) 名	所 蔵	内 訳	備 考
明治五年(壬申)石狩文書(開拓使)	道行政資料室	500字詰 76枚	解読 (未刊)
明治六癸酉年石狩関連文書(開拓使)	同 上	同 上 38枚	同 上
明治七年石狩関連資料文書(開拓使)	同 上	同 上 40枚	同 上
明治七年本庁各局達(庶務局其1~其3)	同 上	675字詰 107枚	同 上
明治八年石狩関連資料文書(開拓使)	同 上	500字詰 135枚	同 上
明治九年石狩関連資料文書	同 上	同上他 77枚	同 上
明治十年石狩関連文書(開拓使他)	同 上	500字詰 142枚	同 上
明治十一年石狩関連文書(1月~12月)5冊	同 上	同上他 380枚	同 上
明治十一年石狩関連辞令	同 上	500字詰 71枚	同 上
明治十一年札幌管下各郡宅地坪数及地価地租調	同 上	同 上 8枚	同 上
蝦夷・松前・石狩の出て来る古文書ノート	函館図書館 松前町史	2冊	解読他 (未刊)
石狩町誌資料(明治篇)	北海学園大 北駕文庫	1冊	解読他 (未刊)
長谷川嗣編石狩罐詰来歴(開拓使文書より)	北 大 道 行 政 資 料 室	500字詰 350枚	解読 (未刊)
罐詰類集(開拓使文書より)	同 上	原稿・コピー	一部解読 (未刊)
厚田写本(安政四年)	北 大	1冊	同上 (同上)
自由党及秩父事件参考文献	北 大	1冊	単行本から関係文を抜 萃筆写
行政資料室案件書名(石狩関係他)	道行政資料室	500字詰 17枚	解読 (未刊)
九町三村時代の石狩			開拓使事業報告・北海 海道旅行記は刊行物抜 萃・筆写・北海道殖 民地状況報文石狩国は解 読 (出版)
石狩場所請負人村山家記録	北海道立図書館		解読 (出版)
「松前産物大概鑑」と「北海道産物製法手続」	北 大	松前丁数 15丁 北海丁数 36丁	解読 筆写 (出版)
空知集治監初代典獄渡辺惟精の日記	三 笠 市		解読(同上)
袖中鏡「十軒」	大萱生秀俊		同 上

(注)

1. 参考…「空知集治監初代典獄渡辺惟精」出版記念祝賀会パンフレット（昭和58年）所載「長谷川嗣氏解読文書略歴」
2. 配列は不同です。
3. ○○字詰とあるのは、用箋です。枚数については概数のものが一部あります。
4. 短期間で採録しましたので、文書や件名及び備考内容について誤漏があるかもしれません。
5. 「抄」としたのは、1のパンフレット所載のほかは、石狩（町）関係を主としたからです。
6. この目録（抄）のまとめに当っては、北海道大学附属図書館北方資料室の吉田千鳥氏より懇篤なご教示をいただきました。



(仮題)

## 長谷川嗣氏の胸懷録(抄)

石狩町町議會議員立起所信(通知ハガキ抜)

昭和四十二年四月下旬 長谷川 嗣 六十一才

一、従来の町政に英智の新風を送り込む為に、青少年の限らない才能を育てる事を町の基盤政策として、教育設備を整え、季節託児所、或は身障児への愛情ある施策を議会で働きかけます。

一、教育費の激増を切り抜ける為、育英資金制度の設置に努力します。

一、その場凌ぎと、総花式の町費撤布を規正し、重点的に辺地の繁栄と恵まれぬ人達が少しでも日向へ出られる方途を考えます。

更に部落根性を排して町全体が明るく生きて行く計画の実行を要求します。

一、農民組織と地区労の拡大強化に努め、更に出稼ぎの人達の組織を造り、三つの力を基にして、働く人達の発言を強く反映させる町政の執行を迫ります。

一、生産を何より大切にすること、乏しくとも正しい自治体の姿勢を整える為頑張ります。

北海道新聞学術文化研究奨励金申請(写)

昭和五十五年 研究代表 長谷川 嗣 七十四才

(研究題目)

## 蝦夷場所請負人文書の所在件名目録

研究内容の説明

徳川幕府時代松前藩に壟断された蝦夷地経済は、一握りの場所請負人が尖兵である。

然し彼等は大部分名前が残って居るだけであり、事跡どころか所在も確かでない。ましてそれ等の文書は四散に近く少い。

近江商人を始め、高田屋、飛弾屋、十五村山を交えて藤野、榎原、伊達と明治まで続いたこの豪商達の生産扣を兼ねての記録文書類は相当に残存して、滋賀大学の近江商人文書を始め、北大・道立・函館市立の三図書館のほか各地に所蔵され、その内の飛弾屋文書及び田付福島屋、佐藤栄右衛門等の目録は既にあり、又、村山伝兵衛、伊達林右衛門両家の文書類は、申請者によってや、詳細な目録が近日中出来る筈である。

続いて、近江商人、西川、林及高田屋文書等所在の判明して居るもの及び藤野、栖原、山田文右衛門及びそれ程著名でなく文書の所在有無さえ不明の多少多くの請負人の所在文書を発見し、所在件名目録を作成して、その散失を防ぐと共に、整理して複写・コピー化を早め、その解読活字化に資し、若い研究者の学術資料に便ならしめ、明治期までの北海道経済の明瞭化に役立たせんとするものである。

### 著述に対しての私的メモ（抄）

「いしかり暦」第六号 一九八六年三月刊

長谷川 嗣 八十才

昔のように生涯を賭けた著述にはそう出会えないにしても、近来の本は少しお粗末すぎるように思われる。又若い人達が学究に立戻れない最大の原因は生活に追はれて研究に立戻れないことでもある。而し之は自分で苦勞して立直らねばならないことであるし、道草を喰った者（编者注―安保闘争等に係わった者を含む）の代償として仕方のない事と考えねばならないであろう。そうして又立直った時には歩んだ人生経験の幅の広さが活かされるのであって、貴重な資産である筈であり、大学で学んだ歴史学とか考古学とか呼ばれ、又人類学とか、地理学

や言語学と細分された基礎的な惣而の専門部門との統合する力である筈である。

何故こんな言わでもがなの事を書き立てるかと言うことは、近頃の若い人は気短に金とか地位とか言う効果を求めて代償の遅い事に生涯をかける様な愚かさには行かないし、世間でも持て囃さないのである。

然し又別に老人の脳訓練の様な我々の仕事では斯界の進歩発展はないのであって、若い世代からも私のやって居る様な仕事にも稀には興味を示す人の出ることを期待して居ることに他ならないからである。

出来ることならやと私が知り得た知識を少しばかり後々に残したいからである。（中略）

又、別して自分の何かを発表する機会に恵まれたとしても、生涯をかけて調べた資料でなければ、仇おろそかには活字に書き残したりは出来ないものであると考えたことの心覚えでもある。（後略）

（注） 以上は、编者が接した分野で、長谷川嗣氏の信条が籠っておると思われるものを抄録したものです。

短歌

大正十一年（抄） 十六才作

労きてただ労きて  
ひたすらに  
父のいかりの解くる日を思ふ

あきらめてただあきらめて  
働けと  
母の涙の身にしむるかな

長くうねれる椅子の汚れを  
電車照らして人なき車内

この風に舟漕ぎ出し  
鮭を取る

若き漁夫の白き顔かな

（注、第十六回札幌短歌会出詠歌）

荒みたる手をかくしたる  
女居て

バーの暖炉に火は燃え盛る

青き服紫の服

赤き服

舞台上に少女は悲しかりけり

我が裡の

余りに我に過ぎし故

あはれはかなき歎きのみする

其中会報九号（五首）

十六才作

よき子とならばや

父は病みてあり

悲しきまざるあらきうめきよ

父病めり雪降り止まねど

此の朝け

無心に見入る百合の花哉

病み勝る父を看病りて

聞く雨の

音は寂しき秋雨の頃

世の中の女がみんなおまへより

醜くくあれよと

月夜を歩む

(注) この歌は「第十五回札幌短歌会」にも出詠

(編者)

四十路経て

まだ妻持たずチョーク持つ

教師の鬚の長き悲しさ

大正十二年 十七才作

さはやかにポプラ木立の見ゆるかな秋のさやけき日の光受け

(注) 大正十二年「婦人界」一月号、所収、若山牧水選の選外佳作歌。

## その時

(詩らしく 一)

長谷川 嗣

その時、

私は灰色のコンクリート壁の囲の中に居た

鉄構子の小窓からは 時に雲が去来して

区切られた空が 青く見えた。

太平洋の戦局はどうなって居るのか

敵艦の撃沈何せき、航空機の撃破何機と言ふアナウンスの後に続くのは、我方の損害はきわめて軽微であるとか

けであった。

その時私は灰色のコンクリート壁の囲の中に居た。

壁をにらんで、壁を透視して、その奥そこをにらんで居る気で居たけれど、

それはうるんで弱い近視眼だった。

高梁飯で痛めつけられた私には永い下痢がつづいて、

作業に出されても、煉化を四枚づつ縛って両手に下げて歩けなかった。

かろうじて持ち上げて、そ・う・ろ・うと歩みを運んでもちょっとした風でよろけてころんだ。

その時私はコンクリート壁の囲の中に居た。

かつての私は頑丈だった。

アドバルーン屋であった私は人夫が来なくても

六〇キロの水素ボンベを、エレベーター無しで、鉄筋家の五階屋上まで、四・五本はかつぎ上げた。

その私の皮膚は牡丹疥癬で化膿し、四肢と下腹部は所せましと浸蝕されて血うみを流しつづけた。

下痢がつづいての栄養失調で体重は四〇キロを割った、風に吹き飛ばされる男になって居た。

その時

私は横浜笹下の刑務所から、武州松山の飛行場建設場に

まわされた。

これだけ弱らせれば反抗も逃亡もしないと認めたのだから。

まだそう弱っていない仲間は皆トロッコを押しした。

トロッコについて歩けない私は鋏で地均しをさせられたが、

鋏を杖にしなければ立って居れないので、怒鳴りつけるのと、こづいたりなぐったりする為に看守が一人私をはなれなかった。

こいつ等看守もふくめて、私が二中在学当時の教練教官であった茶谷と言う後備中尉が部隊長で指揮して居た。

この三百人位の建設部隊は毎日死人が出た。

多い日は十人以上が死んで、部隊は半減した。

雑房で並んで寝て居て、話がとだえ、眠ったなと動かしで見るともう死んで居た。

大いびきをかいて居たのがふと止って、目をさましたのかなと思うと、それも動かなくなつて居た。

動かなくなつたなかには、「病氣になつた牛を箱根の山へひっぱり込んで殺し、皆で食つただけだがなあ」と話した静岡、三島在の百姓も居た。

初めは棺に納めて土中に葬つたが、後ではムシロもつこで運んで、棺なしで穴にほり込んだ。

鋏部隊は死人の穴も掘れなかった。穴掘りは、トロッコ

押し部隊のまだ丈夫な連中だけが当たった。

一週に二回、栄養剤として黄な粉が夕食にふりかけられた。

だが部隊は看守と炊事係や看護係の雑役夫だけ健康だった。

その時

飛行場建設は休止命令が来た。

滑走路をつくっても飛ばす飛行機の補充が不可能になつたのだ。

陸軍記念日、私は突然釈放された。

刑期の短い容体の重い奴から家へ帰って死ぬとのことらしかつた。

病氣で刑期も満足にとめられない奴は聖戦遂行に邪魔をする奴だと追い出された。

その時、

たどりついた東京は 空襲を受けて火の海の中にあつた

その時から二十五年

私は今もたゞコンクリートの壁にもたれて立って居る。

(一九七一・四・二〇)

ある古調

長谷川 嗣

(詩らしく 二)

私達の時代の言葉で云えば

暗雲低迷した激浪の中を

丸木船で漕いで居る時代だったけれど

自分だけは

水平線の彼方に連って、青空が隠されて居ることを  
知って居る積りで居た。

だから、不思議と

どんな汚辱も苦惱ではなかった

暗闇の中の

汚濁のはてしなさは、虚無の連続だったけれど

どこかに希望する何かがあった。

貧乏も富有も一つであったようだ。

たゞの若さと云ふかも知れないが

だから、

芸術があったり 哲学があったり

社会があったり 家庭があったり

闘争があったり 平和があったり

革命があったり 政治があったり

時には酒があったり 女があったりした。

だから、その涯のはてに

神が顕れたり 悪魔が生れたり

死滅したマンモスが出たり

蚤が姿を見せなくなったりした。

だから、何かないかと

地球では探すだけ探しつくした

月でも探しつくした

金星や水星へも探し物に行く日が来ただろう。

嗚呼 だからこそ

あそこが横に裂けて居る女を探して

世界中を旅している男を

人々は学者と尊敬した。

それを造ろうと考える奴を事業家と呼び

時には労働者とも呼んだ。

スポンサーは資本家と称えられた。

だから

善悪があり 美醜があり

賢愚があり 貧富があり 生死があった。

成功があり 落魄が生れた。

そのうねりに私はじーっと座って居る。

(一九七一・七・三〇)

## 長谷川嗣編「石狩罐詰来歴」

### 開拓使文書ヨリ（抜）所載にあたって

次に所載しましたのは、長谷川嗣氏の没後、筆写・解読・史料を整理中、長谷川用箋（二五×二〇）三百五十枚に綴られて出てきたものです。ほかに、「罐詰類集―開拓使文書」の綴りがありました。後者は「生振だより」用箋に解読されたものと、未解読のコピーが合わさっておりました。何れも原本所蔵の北大附属図書館や道行政資料室に通いつづけてまとめ上げたものと思います。

殆ど未綴りの大量の史料のなかで、この二つはいつでも刊行に移すことができるようにまとめられておりました。表紙には、「石狩町史資料第三輯 長谷川嗣編 石狩罐詰来歴 開拓使文書資料篇」と記され、「資料篇」の三文を軽く消して「ヨリ」と傍書きされており、次頁から用箋四枚に序文と解されるものが記され、その末尾近くに、「随って亦石狩罐詰製造所の来歴を追ふことは、開拓使の官宮事業を通して、北海道開拓の歴史を追求することにも連ると思うのである。この意味から罐詰関連の文書を、石狩文書と切放して本輯に採録したのである。（後略）」と記しております。そして、最後に「昭和四十年 月 日」とありました。

この文書は、編者も早くから目にし読ませていただいております。長谷川嗣氏編になる町誌資料は、三冊刊

行されましたが、この文書は、遂にその機会を得ないままに残されたことに思いが深いものを覚えます。

一昨年の九月中旬、編者の自宅に訪問者がありました。用件は、「『罐詰の日』を設定したい。その日は、洋式罐詰の発祥である石狩罐詰製造所で始めて製造した日をもってあてたい。私達の調査では、一八七七年（明治十年）十月十日、同七日、同十五日の日が挙げられるが、このうちの何れでしょうか」とのことでした。

長谷川嗣氏のこの文書が刊行されておいたら、速刻明らかなことでした。

このような私的なこともあって、この「いしかり暦」の限られた紙面のなかに、この文書を所載することになりました。両綴りの約四百枚近い文書（明治九年九月から同十一年八月まで）のなから、恣意で抜き出したものであることをご海容いただきたいと存じます。

また、ユー・エス・ツリートの「北海道漁業報告」はページ数の関係もあって、一部略しましたことをご了承願います。

ご先達長谷川嗣氏の思いが籠ったこの文書（抄）が、明日からの町づくりへの一助となることを心から願って。

（編者 記）

長谷川嗣編

石狩罐詰来歴 開拓使文書ヨリ (抜)

一 鮭肉貯用鉄葉筒製器械御註文ニ付米国紐育代価調

一、器械数 拾壹個附属品共

代米紙幣三百式拾壹弗式拾五セント

内 訳

一、底及蓋ヲ製スル器 三

代米紙幣 百拾六弗

壹斤入ノモノ 三拾六弗

内 式斤入ノモノ 三拾八弗

三斤入ノモノ 四拾式弗

一、髪開蠟付器 一

代米紙幣 式拾五弗

一、応用切断器 一

代 〃 四拾弗

一、蠟附壺 三

代 〃 六弗式拾五セント

壹斤入 壹弗七十五セント

内 式斤入 式弗

三斤入 式弗半

一、旋廻蠟切器 一

代 〃 拾五弗

一、製形器

代 〃 九弗

一、压榨器

代 〃 百弗

〆

右代金之義凡定価ヨリ五步程直引致ス趣ニ付本文ヨリ五分引

此紙幣三百五弗拾九セント

代米金式百七十七弗四十五セント

(金百弗ニ付紙百十弗ノ割)

明治九年中

「罐詰其他魚種」類集 〃 勤業課物産係 〃 ヨリ

明治九年 篠路味噌醬油製煉所

九年十月十一日検印済

二 鮭罐詰造製之義上申

上局 製煉課

今般御雇教師クラーク氏併御用掛出島松蔵石狩表被命



於同所鮭肉罐詰製造別記之通出来仕候間此段上申仕置候也

九年 十月拾日

記

一、鮭肉罐詰 大小 貳拾五罐

内 訊

一、同 七罐

是ハ教師クラ一(ク)氏石狩出張之

節 製造仕候分

一、同 拾八罐

是ハ御用掛出島松蔵製造仕候分

内

同 八罐

是ハ腐敗之掛念不少見込之分

右者御雇教師クラ一ク氏併御用掛出島松蔵石狩表江出張之上書載之通製造仕候也

九年 十月拾一日 製煉課

九年十月十八日御検印済

三 鮭肉罐詰製造方ニ付出張ノ義伺

上局 製煉課

御用掛 勤業課  
出島松蔵

現術生徒

式 名

右ハ鮭肉罐詰製造方トシテ石狩表出張被命候様仕度、最早期節切迫仕居候ニ付不取敢此段相伺候也

九年十月十八日

追テ本文製造品出来之上ハ製否御心得マデ内国博覧会江出品取計可申哉此段及相伺候也

十ノ廿七号

四 火腿製之義ニ度伺

上局 製煉課

檢査課 勤業課

鹿肉 鮭火腿試験之上博覧会出品及東京縦観所御備相成居候ハバ自然望之者有之候節ハ御払下取計申度且鹿火腿之義ハ非常御備トシテ御圍用充御製造相成候方可然哉

先以鹿五百頭、鮭三百尾御用掛出島松蔵江製造方被命候様仕度御入費之義ハ別途御出方相成候様仕度此段相伺候也

九年十月廿六日

追テ本文御許可之上ハ現術生徒之内式名手伝方為致度此段共相伺候也

鹿火腿之儀ハ百頭製造可致事

## 五

北海道漁業報告ヲ編成シ 謹テ

開拓長官 黒田清隆閣下ノ参考ニ呈スルノ榮ヲ有ス

余ハ一千八百七十七年八月三十日米國ヨリ東京ニ到着シ数名ノ官吏ヲ訪ヒ鮭及ヒ其他ノ商品ヲ管詰メスベキ至当ノ製造場ヲ建設スルニ要スル物件ヲ報知セリ。

器械製作場ニ到リ必要ノ物品ヲ其場長ニ通知スベキ旨ノ下知ヲ受ケ直ニ之ヲ注文シケレバ即日製造ニ取掛リ日ナラズ惣テ回漕スベキニ至リシガ、余ハ其器具ノ落成ヲ待ツノ間ニ於テ魚市及ヒ漁舟ヲ審査スルノ機会ヲ得タリ

(八行略)

器械及ビ諸人氣良好ノ汽船玄武丸ニ乗込ミケレバ、余輩ハ九月十六日東京灣ヲ解纜セリ。乗込ノ士官ハ皆快活ニシテ天氣モ亦タ朗晴ナルノ景況ナリキ、解纜ノ後二日

目余輩魚ノ大群ニ逢ヘリ。船上ヨリ見タル処ニテハ魚<sup>サ</sup>□<sup>バ</sup>ノ如クニシテ其無数ナル殆ト一日程絶ヘズ之ヲ通過セリ。鯨魚モ亦タ許多ニシテ小魚ヲ驅逐殘食シテ其間ニ爽快ノ樂ヲナス如ク見ヘタリ。

同月十八日函館ノ極メテ良好ナル港ニ着シ許多ノ官吏及ビ市民ニ接見シ近傍、大口魚、鯨及ビ鱒ノ漁獲アリ。且ツ鮭ハ多クシテ昆布ノ輸出モ亦タ大ナル由ヲ聞。

二十日函館ヲ解纜シテ小樽ニ向フ、行程大約六十英里ニシテ沿岸ニ位置セル数千ノ人口アル一邑ヲ視タリ、有名ノ魚場アル地ナリト云ヘリ。

二十一日小樽ニ到着セリ、該港ハ住民数万アルノ一邑ニシテ其大口魚<sup>サ</sup>及ビ鯨ノ漁場ノ廣濶ナルニ名アリ。該地ヨリ大約二十英里ノ間騎行シテ北海道ノ首府ナル札幌ニ到リ官吏ニ見エシニ、其接待邸重ニシテ良好ノ旅館ヲモ貸与セラレ、官立ノ家屋及ビ学校等ヲ見タリ。該府繁榮ノ進歩ハ甚タ疾シト云フ。余輩ハ該地ニ於テ諸事ヲ整頓シ遂ニ東北十七英里ヲ隔テタル石狩河口ノ就業場ニ移転スルノ豫備ヲナスニ其時間ヲ支消セリ。

諸器械及ビ小道具トモ日ナラズ石狩ニ到着セリ、一家屋ノ既ニ夏日中建設セシモノナリ。少シク之ヲ模様替シテ以テ頗ル能ク我目的ニ適フニ至リケレバ直ニ蒸氣罐ヲ据ヘ、間モナク鮭及其他ノ魚ノ管詰ヲ始ムル事トナレリ。

十月十日始メテ五十尾ノ鮭ヲ以テ其業ニ着手ス。役夫

全ク其事ニ馴レズ為ニ遲

該製造場ノ開業後間モナク掘鎮台閣下其他ノ官吏、爰ニ巡見セルトノ□渠ヲ有シ、其後日ナラズ函館駐劄英國領事モ來觀セラレ、次テ「ハリー・パークス」君閣下モ亦タ臨マレタリ。

當時余輩ノ遭遇セザル可ラザリシ困難中ノ最大ナルモノハ管ノ下品ニシテ其繼目實ニ悪ク往々漏洩アルニ至リシ事是レナリ。是素ヨリ職工ノ鍛鍊ヲ欠クノ為メニ生スルノ事ニシテ、少シク鍛鍊セハ全ク免レ得ベキノ困難ナルハ論ヲ待タザルナリ。其後間モナク鮭ハ大群ヲナシテ集リ來ル事ヲ始メ（トシテ）河口外ニ於テハ其漁獲往々甚タ大ナリキ。

上流大約半英里ノ處ニ一家屋アリ。少シク之ヲ模様替之□□以テ魚肉及ビ獸肉ヲ醃藏並ニ薰製スルノ場所ニ必適スルニ至レリ。

十一月九日ニハ一曳ノ綱ニ三千内至五千尾ノ鮭ヲ得タリ。綱ハ各長六千尺深四十尺ナリト言ヒ、其大サノ綱一投ヲ以テ一曳ニ一萬尾ノ鮭ヲ千八百七十五年ニ獲タリト聞タリ。

十一月二十九日ニ至テ鮭ノ數大ニ稀少トナリ其質モ亦粗惡ナリ。依テ漁事ハ漸ク中絶ノ姿トナレリ。

薰製鮭ヲ市場ニ出シテ良キ景況ヲ示サント欲セバ製造終了スルヤ否直ニ之ヲ輸送セン事ヲ要スルナレド、運送

其便ヲ欠キ、當時石狩ニ殘存セル薰製鮭許多ニシテ頗ル損害ヲ受ントス。

鮭漁ノ期節全ク過去リタル後鹿肉ノ製造ニ取掛レリ。其肉ハ畜ニ多量ナルノミナラズ其質甚タ賞レタリ。古來世ニ知ラレタル鹿肉中ニハ此肉ニ及フモノナシ。惟ニ此肉ヲ醃藏スルノミヲ以テ一大商業ヲ起シ得ベキハ疑フベキモアラズ。鹿ハ甚ダ許多アル様子ニテ北海道ニハ箬竹到ル處ニ繁茂シ東海岸ハ奇妙ニモ積雪甚タ薄クシテ其竹ヲ壓セザルユヘ之ヲ食フテ食物ノ欠忘ヲ憂フル事ナキナリ。余カ聞ク所ニ據レバ年ニ鹿ノ獵獲二萬乃至三萬頭ニ及ビ□□モ目ニ見ユル程ノ減少ヲ生ゼズト云フ。

札幌ノ牛肉少許ヲモ亦醃藏シ以テ当期ノ事業ヲ終ヘタリ。

#### 蛎

大約二千俵ノ蛎ヲ東海岸ニ有ル各ノ産所ヨリ汽船ヲ以テ取寄セ、其一部ハ十二月十九日ニ陸揚セリ。天氣寒冷ナリシガタメ損傷甚ダ稀少ナリキ。最後ノ陸揚ハ同月二十八日ニシテ大約三十俵ヲ除クノ外悉ク之ヲ管詰セリ。其三十俵ハ石狩河ノ東側ニ植付ケルノ積リナリシガ氷雪忽チ増殖シテ其場所ヲ梗塞セリ。若シ明年又タ之ヲ試ミントナラバ今少シク河口ニ接近セル所ニシテ氷雪及ビ河水ノ（タメ）其成長ヲ妨ケザル一層良好ノ地タルベシ。

（以下十行略）

石狩河ノ鮭ノ漁場ハ從來世ニ知ラレタル中ノ最大ナリシモノニテ年ニ寄リテハ其獵獲大約一百八十萬尾ニ至ルト云ヘリ。就中秋漁最モ多ク漁獲惣高ノ三分ノ二ニ滿ツルナリ。

春鮭ハ真ノ鮭カ或ハ鱒ノ一種カ未タ疑ナキ能ハズ。此処得タル報知ニ據レハ其魚ハ随分大形ニシテ甚タ肥ヘ、且ツ其肉色ハ極メテ濃厚ナリシト云フ。之ヲ以テ是ヲ視レバ管詰トナスニ最モ望マシキ種類ナルガ如シ。

本年充分ニ其試験ヲ行フ事、ヨリ肝要ナリ。漁夫ハ曰ク春天ノ漁獲ハ氣候温暖ナルガ為其魚ヲ醃藏セン事甚タ難シト、然モ其困難ハ容易ニ避ケ得ベキ事ナレバ最モ努力シテ斯ノ如キ貴重ノ魚ヲ保存セン事コソ急要ナレ。

#### 鮭ノ人造

鮭卵孚化ノ為メニ適宜ノ地位ヲ札幌ニ相シ、直ニ爰ニ機械全備ノ一舎ヲ建タリ。然モ既ニ卵子ヲ得ル前ニ冬景色トナリ之ヲ獲ン為メニハ險惡ノ路程二十五英里ヲ經テ遠ク之ヲ取寄セザルベカラザルニ至レリ。於是カ其卵子ハ孚化場ニ達スルノ前ニ堅凍セリ。故ニ桶ニ水ヲ盛リテ生ケル鮭ヲ取寄セ孚化場ニ於テ其卵子ヲ取ラン事ヲ勸メシカド寒天及ビ風雪ノ為メ遂ニ之ヲモ為スヲ得ザリキ。此業ヲ成就セントスルニハ十一月中旬既ニ其鮭ヲ撰択シ卵子ノ成育スル迄ハ孚化所近傍ノ池ニ養ヒ置カン事ヲ要ス。左スレバ其成功ハ疑ヒナカルベシ。米國ニ於テハ

此法ヲ以テ年々数百万ノ鮭卵ヲ孚化シ、是ヨリ生スルノ利益ハ既ニ籍々トシテ世ニ知ラレ、啻ニ元ト鮭ノ多カリシモ漁獲其度ニ過キテ絶無ニ帰セシ地ニ放養シテ再ビ増殖ヲ致セシノミナラズ、古來未ダ曾テ鮭ヲ見ザルノ所ニ於テモ亦之ヲ生ズルニ至リシナリ。

#### 大口魚

(全文十二行略)

#### 鯨

(全文十七行略)

#### 海鳥糞

(全文六行略)

小樽ノ漁場ハ石狩河ト相距ル僅カニシテ順風ニハ、二三時間ニ航行スベシ、其河口ノ沙州ト雖モ大約一丈二尺ノ水アリ。故ニ喫水ノ浅キ船ハ四時殆ト常ニ其港内ニ入ル事ヲ得ベク一タビ其河ノ中ニ入レバ水深クシテ碇泊殊ニ良ナルナリ。

船舶ノ出入ヲ安全ナラシメン為メニハ、其河峽ニ善ク浮標ヲ設ケ其航路ヲ誤ラザラシメン事ヲ要ス。

目下建築中ナル札幌迄ノ輪車道成功セバ石狩、札幌間ノ交通ノ便ヲ得テ石狩ニ人口ヲ増殖スベキナリ。

交通及ビ運貨其便ヲ得バ石狩ハ廣大ナル漁業ノ中心トナラン事蓋シ自然ノ勢ナリ。

現今使用セル魚肉醃藏場ノ家作ハ次回ノ漁期ニ至ルノ前ニ於テ二個ノ張出シト管ヲ製シ且ツ之ヲ藏スベキ管製造場トヲ増設セン事ヲ要ス。

二箇ノ蒸汽罐ハ一日ニ五千管ヲ製シ得ベキノ容量アル

モノナリ。然モ目下ノ製造場ニハ其管ヲ着々製シ上ケ、且ツ之ヲ至当ニ貯藏スルノ余地ナキナリ。

余ガ補助手ノデ・スウット氏ノ援事力ヲアリ。余ヲ補翼シテ貴重ナリシハ余カ之ヲ記載スルヲ以テ一大面目トスル所ナリ。出島氏亦タ有用ナリキ。石橋氏ハ鮭漁ノ期節中多クハ当製造場ニ在テ甚タ為ス所アリシガ、東北海道ノ處々ヲ巡回センガ為メ召戻サレタリ。現術ハ多クハ生徒ノ手ニ成リ其進捗最モ良ク今月ニ至テハ管ヲ製シ肉ヲ充シ、之ヲ製シ上ケテ匣詰メトナシ市場ニ出ス迄ノ事ヲ執ルニ最適スルハ勿論、尚幾多ノ一層精密ノ業ヲ成スニ堪ユルモノトナリタリ。

鮭ノ薰製及ビ大口魚ノ醃藏ハ佐々木氏ニ委セリ、同氏ハ信實ニシテ該業ヲ完全ニ成就スル事ヲ学ビ得タリ。金澤氏モ亦タ貴重ノ補助ヲナセリ。

一千八百七十八年四月三日

於石狩 呈

ユ一・エス、ツリート  
デ、ビ、ペンハロー代書

石狩製造場 製品表

一八七七年十一月	鮭塩漬	二五斤入	八〇樽
"	鮭卵		八五罐
"	牛肉		二二二罐
十月	鮭	二斤入一二〇九二管	
十二月	薰鮭		七六九尾
十二月	蛎		三、二二六管
十二月	鹿肉		九、三五八管
一八七八年三月	乾製大口魚		二、四〇〇尾

ユ一・エス・ツリート  
デ・ビ・ペンハロー代書

六

石狩出張 札幌

出嶋松藏殿 外事課 小嶋

御雇教師トリート氏米國出立ノ御旅費御見積トシテ垂金六百弗ケブロン氏ヨリ請取来候ニ付右精算ノ儀兼テ客歲十二月中トリート氏当地御用駐在中申聞候処其地着ノ上速ニ精算書当課ヘ回付ノ旨申答候得共今ニ何等ノ報告モ無之、然ルニ東京同課ヨリ屢次右精算之儀促来候ニ付

右精算書至急当課へ差出無之テハ甚不都合之苦篤ト同氏  
へ御申通右御送致方可然御取計ニ相成度此段佐藤權少書  
記官殿ノ指令ニ因リ及御照会候也。

十一年二月十四日

本廳

石狩出張

外事課

製煉課

出嶋

昨御申越之教師トリート氏米國ヨリ東京迄ノ旅費正算  
調ノ件直チニ教師へ被申聞候處本日不快ニ付両三日中ニ  
取調可差廻旨ニ付御了承有之度此段申進候也

二月十六日

記

一、亜金六百弗也

右者千八百七拾七年七月十二日日本―東京迄旅費前  
借トシテ「ホーレン・ケプロン」ヨリ受取候也

内訳

一、亜金二六〇弗三五セント

但イースト港ヨリ華盛頓迄ノ旅費

七月十四日

一、〃金二六弗三五セント

但華盛頓滞在中入費

一、〃金一三三弗五〇セント

但同所ヨリ桑港迄汽車ノ乗賃

七月廿一日

一、〃金四七弗七五セント

但右乗車中諸賄料

一、〃金五一弗

但同月廿一日ヨリ八月八日迄同所滞在中入費

八月八日

一、〃金二五〇弗

但同港ヨリ横浜ニ航スル汽船運賃

八月三〇日

一、亜金三弗九〇セント

但横浜ニ於テ賄料

一、〃金五弗〇五セント

但東京滞溜中ノ人車賃等

八月十二日

一、共計 五百四拾三弗八十セント

〃 十七日

一、開拓使エ返納スヘキ残金 五拾六弗式十セント

右之通正ニ受取候也

ユー・エス・トリート

(注……編者)年月日は記入されていないが、長谷川嗣氏の綴りか  
ら推察すると、十一年二月廿三日と思われる)

## 松浦武四郎研究会のあゆみ(抄)

吉 田 千 萬

竹四郎研究会が発足してから満六年が過ぎ去りました。これは昭和五十七年の夏の頃と記憶しておりますが、当時北海道大学附属図書館北方資料室の常連で、文書等資料を調査しているお二人がおりました。

それは、長谷川嗣さん(故人昭和六十三年二月)と丸山道子さん(故人昭和六十二年二月)でした。丸山さんは松浦武四郎の現代語訳(「東西蝦夷山川地理取調紀行」八冊刊)に情熱を注がれており、長谷川さんもまた、北方資料の解説(『空知集治監初代典獄渡辺惟精の日記』刊)、研究を精力的に行なっております。この二人は研究目標がほぼ同一だっただけに意見が合い、「松浦竹(武)四郎を語る会」を作るようになったようです。第一回目はサッポロ堂書店(北区北一〇西四)の二階喫茶店で開催され、石原さん(サッポロ堂書店)、兼平さん(武四郎研究会事務局)等五、六人で、私も誘われるまま参加しましたが、一杯のコーヒード席を二時間以上占領するという、まさに気楽な土曜日午後の会合でした。「松浦武四郎」といわれても小学生の郷土読本に出てくる「北海道の名づけ親」程度に覚えている人が多いので

はないか、ということ。「竹四郎の著作と所蔵機関の調査」ということに意見の一致をみました。長谷川さんは「国書総目録」から抜書し、他の会員は各自調査するこ  
とになりました。

その後、会員数の増加で喫茶店での会合は無理となり昭和五十八年四月の例会から会場は兼平さんの奔走で札幌市北区民センターに変わりました。会報第一・二号を編集した丸山さんは考えることがあって同年秋にして会を去りました。昭和五十九年三月役員改選があり会の代表に秋葉実さんが就任し、本会機関誌「会報」が「会誌」と改名され「松浦竹四郎研究会会誌」創刊号が、一九八四年四月二十日発行されました。内容も論文を中心にしての「会誌」を編集することになり、現在まで第七号(一九八八・三月発行)まで刊行され、「武四郎研究会」はますます充実して今日に至っております。

また、本年三月には、「松浦武四郎没後百年記念事業協賛会」が設立され記念事業の一環として各種行事が大に開催され、故人となられた二人の先輩は小さな夢がこゝまで広がるとは思ひもよらなかったことでしょう。ここ数年月私のまわりでは「武四郎・武四郎」と武四郎に没頭しました。多数の皆様の御協力により生誕地三重県三雲町と、北海道で「松浦武四郎翁」の業績が再認識され、とても喜ばしいことと思えます。「武四郎研究会」のますますの発展を祈念します。

「松浦武四郎研究会」例会記事

昭和五十八年

二月例会 二月五日 「おばちゃん」本年度最初の

例会なので新年宴会も兼ねた。

・新年度からの会の中心課題について 長谷川嗣代表

・資料研究「松浦武四郎書簡一通」 高木 崇世 芝

臨時会合 三月十二日 サッポロ堂二階「喫茶店」

・武四郎宛書簡刷込みの蝦夷屏風（松浦孫太解説）

谷澤 尚一

※「会報 松浦武四郎研究会第一号」

一九八三年二・三月合併号

四月例会 四月三日 北区民センター

・長谷川代表の開会挨拶

・会則についての提案 兼平 睦夫

・会員回覧、コピー配布の未発表資料の扱いについて

丸山 道子

・北海学園大学北駕文庫の中の「蝦夷地名録」三冊

「蝦夷地名解」一冊について 小林 和夫

・幕末・明治の知られざる人名 谷澤 尚一

・武四郎野帳について 秋葉 実

五月例会 五月十三日 北区民センター

・松浦武四郎蔵版 東西蝦夷山川地理取調図の製作過

程の問題 兼平 睦夫

・松浦の野帳・蝦夷地踏査の各著作・記録にみえる日

付の違いについて 秋葉 実

※「会報 松浦武四郎研究会第二号」

一九八三年六月号

六月例会 六月五日 北区民センター

・加藤木賞三・蝦夷屏風書簡 谷澤 尚一

(以下略)

この一文(抄)は、晩年の長谷川嗣氏が、石狩関係資料の調査や古文書解読作業等で、約二十年間通い続けた北海道大学附属図書館北方資料室に、長年ご勤務の吉田千萬氏のご好意により転載させていただいたものです。編集の都合で後半を省略しましたことをお詫びいたします。

なお、初出は、「松浦武四郎研究会会誌―没後一〇〇年記念特輯―第八・九合併号」松浦武四郎研究会 一九八八年一二月 です。

(編者記)



## 編集後記

石狩町郷土研究会の機関誌「いしかり暦」第八号を、会の先達であった故長谷川嗣氏の追悼号とすることになったことは、冒頭の山口会長の発刊の辞にあるとおりです。

一九八八年度事業計画としての機関誌発行のため、会員の執筆と寄稿をいただく時間的余裕もなく、ために遺稿整理に当たっていった私と子息の心平氏が編集を担当しました。

ご承知のとおり、故人の業績とその活動分野は広汎であり、私の関わりはその一分野に過ぎなかったことや、膨大な遺稿の整理が終っていないことなどから、逡巡が大きかったのですが、それを越えさせたのは、ご生前中余りにもご自身を語ることの寡なかつたご先達についての一部なりとも――それが片寄った分野になろうとも――早くご紹介することにより、数多い未発表の地方史研究史料が広く活用される方が講ぜられることと、ご親交あつた各界の方々のお力添えによって、知られざることの多かつた故人の全貌が明らかにされる一助ともなればとの思い入れからでした。

ここに至るまで支えて下さった息心平氏と会員の方々、ご教示等を頂戴しました吉田千萬氏及び編集の諸事にご苦勞された石橋孝夫会員に深くお礼を申し上げます。

(一九八九年三月 田中實記)

いしかり暦 第八号

平成元年三月二十五日 印刷

平成元年三月三十一日 発行

発行者 石狩町郷土研究会

石狩町花川北四条二丁目一五〇

山口福司方